



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成17年2月20日
通巻41号

第33回定例研究会のお知らせ

定例研究会を下記のとおり開催いたします。ふるってご参加ください。なお、本定例研究会はし尿研究会第34回例会を兼ねて開催いたします。

記

日時：平成17年2月27日(日)午前10時より
場所：東京ボランティア・市民活動センター
A会議室(セントラルプラザ 10階)

講師：柳下 重雄氏

演題：「江戸の下掃除(便所の汲取り)

代金の高騰に見る行政の対応」

内容：寛政年間に江戸中の下掃除(便所の汲取り)代金の高騰が問題化し、代金を支払う側の下掃除人たちと、

代金を受け取る側の武家屋敷や町方の家主たちとが対立しました。このとき、行政はどのように対応したのでしょうか。

追記；柳下さんは、今月当会の下水道文化叢書第8号「江戸の下水道を探る〈享保・明和・安永の古文書から〉」を刊行されます。本講演は、その調査段階で入手した史料を基にしています。

【会場案内】新宿区神楽河岸1-1

電話 03-3235-1171

JR, 地下鉄 飯田橋駅下車 徒歩1分

第32回定例研究会「江戸遺跡にみる町屋の下水」報告 本会会員 関野 勉

平成17年1月14日(金)東京・飯田橋の東京ボランティアセンター・市民活動センターで「江戸遺跡にみる町屋の下水」と題して、下水道文化定例研究会がし尿研究会例会とのジョイントで行われました。

講話者は仲光克顕氏(東京都中央教育委員会)で氏自らが発掘に携わった豊富な経験とスライド、絵図などの資料を使用して、地図等に現れない当時の下水の実態を発表されました。今回紹介された対象遺跡の主な場所は中央区日本橋一丁目・二丁目、一丁目は以前白木屋デパート(その後東急デパート)の駐車場等があった場所でした。何年前には私も見学会に参加した記憶があります。中央区は江戸時代に徳川家康が入府以来造成された場所との事で時代・時代に於いて絵図や古文書等が存在するので、それ等と対比して、遺跡の発掘をもとに絵図に現れない実態を明かされました。日本橋川の東側、現在の三越がある側には現在も卸し問屋、江戸時代には日本橋河岸があり、一心太助が活躍した場所と思われる。そして発掘した場所には町屋があり、下水があり、その下水は1)生活排水、2)雨水処理、3)敷地区分、の役割を果たしていたと考えられると言われました。そして現在の地面より掘り下げて行くに従い、時代・時代に生きずいていたと思われる出土品やら、下水が現れ、その場所だけでは判断出来ない様な遺構もあったとの事でした。

限られた場所と予算で期限を切られて発掘するとの事で苦労が多かったと思われ。そして、今回は下水についての話が主だったので、発掘品についての話はほとんどありませんでしたが、何か変わったものがありましたかとの質問に、芝居小屋の入場券が見つかったとの返事でした。木片に墨で

書かれていたとの事で大変珍しいとの事でした。発掘した下水遺構の傾斜等をみると日本橋川の方に向かっていないとの事で、この場所のみの発掘では芥溜等もあるが、その先がどうなっているのかまでは分からないのでとの事でした。一丁目遺跡では、発掘された排水関連の遺構を元に、文献資料からはうかがうことの出来ない敷地境を特定され、二丁目遺跡では下水木樋を中心とした遺構により、屋敷割は、年代が下がると共に細分化され、それに伴い明瞭な地業がなされていた建物址は姿を消し、長屋の様な建物に変容して行くことが、下水木樋が増加する事によって分かる仲光氏は言われました。

今後また別の遺跡の発掘等との比較において明らかになる部分もあると言われていました。今回は遺跡全体と言う事では無く、町屋の下水に限った話でした。



定例研究会が終わって(前列中央が講師の仲光氏)

途上国と日本のごみ処理に対する姿勢 —ごみに対するその国の文化—

本会運営委員 石井明男

途上国のごみ処理と日本のごみ処理と比べて書いてみました。書いていく途中で議論が必要だと思われる箇所が随所に出てきました。ご意見をお聞かせ下さい。

「ごみ処理」ということ

日本からごみ処理の調査団が来たというと、「何でごみ処理みたいなことをしに日本から来るのか」という現地の人がいる。なぜかは分からないが、「ごみ処理は誰でも簡単にできる」と考えている気がする。現にバングラデッシュ人の友人が奥さんから「なんであなたがごみ処理なんかの仕事をするのか」と聞かれたそうである。

今日本では自治体の人気局は清掃局だということが多い。循環型社会を目指すという社会の流れの中心になる理由もあるし、技術屋なら清掃技術を支える技術も魅力的である。「ごみ処理」は最近の地方自治体への事業の住民の要望の上位に位置する。「ごみ処理」の難しさに対する認識は先進国ほど高いように感じる。飛躍するが、こうしてみると「下水文化」とか「ごみの文化」という言葉は恐ろしくレベルの高い言葉であることに気がついた。

「収集率」について

「収集率」は日本では聞かないが、途上国のごみ処理では重要な話題になる。日本ではどこの清掃事業概要を見ても「収集率」の項目はない。日本では排出されたごみはその日のうちに 100%収集するのでこの話題になることは無い。まれに清掃事業のストライキがあってもいつの間にか街中のごみはなくなっている。年末や年始で排出されるごみの量は膨大であるが、夜 12 時くらいまで収集して完全に収集してしまう。日本人のごみ収集に対する努力には敬服するとともに、奇跡も感じる。

しかし途上国では収集率が 50%くらいは当たり前で残りのごみは取り残すか、収集はしても川に捨てたり、あるいは住民は街中の川に不法投棄したりしてしまうのでこの場合は収集したくても収集できない。日本では川面が見えなくなるくらいごみで一杯という光景はみないが、それでは日本では昔から清潔だったかということも無い。昭和 35 年の「ごみと生活」というビデオを見たことがあるが、映像では川に捨てるのは当たり前、道路に捨てたり、列車から捨てたりであった。これがどのようにいつごろから変わっていったのかはわからない。

「収集率」という言葉をもて、途上国のごみ処理の概念と日本のごみ処理の概念が少し違うことを示している。

「特別清掃区域」という

限られた地域で行われた清掃事業

昭和 45 年の「廃棄物処理法」までは旧清掃法時代は「特別清掃区域」が存在した。特別清掃区域以外は清掃局が関与せずこの住民は自家処理をしていた。市町村の収集や処分能力が十分に無い場合も「特別清掃区域」に指定せず自家処理を促していたと考えられる。では自家処理とは

いったい何をしていたのかというと発生するごみも少なく、庭に埋めたり、燃やしたりしたのだろうが実態は資料も無く見当がつかない。

収集能力が足りない途上国でもこの制度を導入したい誘惑に駆られるが、価値観の違いや社会背景の違いから説明が難しい。

「ごみ焼却」への努力

日本では明治時代から今まで綿々とごみ焼却に取り組んでいるのは驚きである。焼却炉が常に存在感があったのは、衛生思想が定着していたこともあるだろうが、日本は土地が狭く埋立地が見つけにくいことにあった。また、公害規制が焼却場の公害除去設備の発展と同時平行して進んでいた。能力に問題があるときは燃えるもの、「雑芥」だけを燃やそうという「雑芥」と「厨芥」の分別収集で切り抜けた時期もあった。

また、もうひとつ驚くことがある。昭和 37 年の西淀市で焼却炉を建設しようとデロールの炉を輸入しようとした当時の市の予算が 14 億円なのに 16 億円の焼却炉を導入しようとした清掃技術者の努力は想像を絶する。

コンポストの幻想

設備が安いと思えるからか、他に良い方法が無いからか途上国はコンポスト好きである。現地でごみ関係の会議をするとコンポストをするとごみ処理はうまくいくという話が出るがあまりうまくいった例は聞かない。

ある国ではごみを腐敗させガスを抽出しガスは発電、熱源、残りはコンポスト、CDM (Clean Development Mechanism, 炭酸ガスの取引) プロジェクトとしても最高であるというようなシステムを外国のメーカーが売り込み、クライアント側の政府は技術提案を評価をしていた。

明治 33 年 (1900 年) に「汚物掃除法」の制定

どのようにして成立してきたかはその背景は調べてないが、日本ではすでに 100 年以上も前、明治 33 年 (1900 年) に「汚物掃除法」が制定された。多くの途上国では廃棄物関連の法律が一本も無い国が多い。法律の成立のしかたに違いがあるにしても法整備から進めていくのはあまりに道が遠いと感じる。ある国で「廃棄物処理法」を制定しようとしてプロジェクトを作ったがトップダウンの国でボトムアップにより進めていくのは骨が折れた。

「人材育成」の難しさ

日本では今でこそ清掃事業は光があたってきたが、少し前までは親が清掃局でも子供が親の職業を学校にも言わなかったと聞いたことがある。また、途上国では清掃従事者のステータスは低い。日本人が技術移転のために何年も育ててもチャンスがあれば清掃事業から離れていってしまうので人材の確保が難しかった。いろいろ資料を提供しても共有することはなく異動時にすべて持っていってしまう。情報や知識が仲間から仲間へ伝わるということも少ないように感じた。

「ごみ戦争」の必然性

東京都では昭和 46 年美濃部都知事時代に「ごみ戦争宣言」をした。予算のつき方、人材の集まり方、技術レベルの向上、住民の見る目、社会、マスコミのごみ問題の扱い方など、この後から清掃事業はすべてが変わったといわれる。

途上国でごみの仕事がうまくいかないとき、「ごみ戦争」でも起こればいいと思ったが、良く考えるとこの「ごみ戦争」が起こるにも、都政の中でも住民の間でもごみ問題の議論を始める背景が十分に醸成されていたことに気づく。こうした素地がなければ、「ごみ戦争」は起こらないと思った。

終わりに

「ごみのデータのこと」、「ごみ処理の背景の思想のこと」など書いておきたいこともあったが別の機会にする。日本で清掃事業の仕事をするときにもさまざまな歴史的背景を知ることが重要だと思っているのだが、ここまで拙文を書きながら思うことは、途上国のごみ処理の歩みはなぜそのようになったか、その必然性を語るだけの歴史的背景を十分に知らないで奥深く語れない悔しさであった。経験上非常に難しいことではあるが。

このことに対するご意見をお待ちしています。

Bangladesh 衛生改善プロジェクトに参加して

本会会員 小寺 武夫

「Bangladesh って、どんなところだった？」と問われても……エ〜と、ウ〜と！……………。しいて言えば、……昭和 20 年代をベースに、平成をひとさじ、江戸の身分制度を隠し味に、人間をテンコ盛りにして、クレイジーに掻き回したカクテルティー（くに）かな。……どこが頭なのか足なのか、掴まえようの無いエネルギーな生命体……。あどけない表情をみせる子供たちと辛苦の跡を刻む大人たち……。トイレ排水が流れ込むポンドで、石鹸を使って身体をゴシゴシ洗う清潔（?!）好き……等々。

わずか 10 日ばかりの滞在ではとてもとても、うまくまとまらないというのが正直なところです。彼の地から帰国して、5 日をかぞえましたが、今も、震度 7 の余震の中にある心地です。この国の現状に対してどうすれば良いかなど、とても軽々しく口に出るものではありません。

今回建設したトイレの今後は容易なものでありません。まず、人糞の乾燥が可能かどうかの疑問が生まれました。集落は大きな木立に囲まれ、太陽の直射日光を遮って人々の住環境を守っています。真夏（40~45℃）のことを思えば、とても木を切ってしまうとは言えません。太陽エネルギーを活用するに妨げとなっています。乾燥物を、他の資材と混合、醗酵させようにも、有力な牛糞はかまどの燃料になっていて、もう「余り」はないように見受けました。



カオス的なオールドダッカの街並み

堆肥化のために、村で共同作業するなどということは難しくそうです。

人間の排泄物は、Bangladesh 流に、食物連鎖の中に溶け込んで循環しています。地下浸透の底無し便槽、満杯になれば頭を壊せば、ノープロブレム。ポンドに、排水路に、水田に流出します。ポンドの魚が喜びます。これに網を打てば、市場に出かける必要もありません。1 年に 1 度の洪水がポンドを洗い、便槽を清めて水田に散布します。肥料になります。その米を食べます。また、どこの国にも水周りを 1 ヶ所に集める習癖があるらしく、トイレと浅井戸の離れは 5~10 メートル。彼らは、この自然循環に命をゆだねているのです。

Bangladesh の衛生問題の解決は、まず汚染型循環社会からの脱皮です。その動機づけに施肥効果に着眼したことは決して間違っていないと思うものの、そのためにアレコレ手をかけなければならないとすれば、この国の人々は果たして受け入れてくれるだろうかと不安になります。洪水のもたらすベンガルの恵みに浸りきってきた人々にとっては、まず手間がかからないことが第一。衛生的に無害化さえできれば、洪水に乗せて処分するぐらいのことは、ベリーグッドとすべきかもしれません。下肥に対する彼らの心情もあります。肥料への転用は息の長い取り組みとなるでしょう。根競べです。これらからして、やはり研究会の当初構想、「嫌気化プロセス」に光明を見出したいというのが私の直感的結論です。手間がかからないこと、施肥効果、病原菌の効果的撲滅です。

ガンジス河にコップ一杯の水道水を注いで浄化するかのとき無力感に襲われます。しかし、‘一点の火花も燎原を燃え尽くす’の喩えもあります。一步を踏み出したばかりです。この一步を大切にしていきたいと思えます。

最後に、会員でなかった私を、プロジェクトのスタッフに加えていただき、貴重な機会を与えて下さったことに、改めて、酒井代表をはじめ研究会の皆さんに感謝いたします。また、常に励ましてくださった高橋邦夫氏をはじめとする同行諸氏にも心からお礼を申し上げます。私自身にとっても、海外ボランティアへの想いを一層強めるよい機会となりました。決して無にしないうもりです。ありがとうございました。

Bangladesh のトイレ建設（第6回訪問）に参加して

本会員 松田 旭正

1月24日ようやく正月気分の抜けた成田を出発しマレーシアのクアランプール経由で Bangladesh のダッカ国際空港に到着しました。

今回訪問の目的はおよそ次のような内容のものでした。
①技術協力プロジェクトにより建設したトイレの完成確認、②新設したトイレの周辺地図の作成、③新設したトイレの今後の使用方法とトイレ周辺の環境調査に関する現地専門家との協議

前回（2004年）8月末に Srinagar（当初プロジェクトを予定していた地域）を訪問した際にはまだ雨季（6月～10月初旬）でほとんどの農地は水没しており、現地の農作業や農作物を見る事はできませんでした。Bangladesh においては、毎年洪水やサイクロンの被害を受けており、昨年夏の（2004年）の洪水は10年に一度の記録的な大洪水で国土の40%以上が湛水したようです。

今回（2005年1月）訪問したのは乾季（10月中・下旬～3月）で昼間の気温が24℃～30℃前後で、朝夕は過ごしやすく、日本の10月頃の気候を思わせる陽気でした。この国にも大変なグローバル化が進み、以前は政府機関や大学においてのみ英語が使われていたそうですが、今では中流階級にも普及し、下校途中で出合った小学生が脇に抱えた英語の教科書を何度も見かけました。子供達は学校で英語を学んでおり、この国のグローバル化が急速に進んでいる事を感じました。

また子供達は大変よく働き、小学生くらいの年齢の子供が水田を耕したり、畑の草取りや家畜の世話をしていました。また朝早くから茶店の手伝いや、野菜を運ぶ荷車の後押しをしている子供も見かけました。

村人達の日常生活をみると食料については大多数の人のびとは粗末ではあるがほぼ満たしているのではないのでしょうか。

Bangladesh 料理はカレーが一般的で、野菜は自家菜園で採れた野菜（きゅうり・玉葱・とうがらし・にんじん等）を生食にしています。また、薬物の野菜は種類が多く、かぼちゃの葉の付いたつるもバザールで売られていましたが、どのような料理方法があるのか興味がありました。この国では油料種子（なたね、からし菜）は有名で広大な水田に黄金色の菜種の花が咲きみだれ、この風景こそが国歌の「My Golden Bengal」だと感激しました。

魚は淡水魚が多くコイ科の大型魚類がバザールには沢山並んでいましたが、あまり衛生的な取り扱いとは思えない状況でした。鯰は高級な食材とされているようです。魚は集落の近くにある溜池の魚を投網で捕って食用にしていた所もありました。

肉はバザールで羊の肉と山羊の

肉が販売され、我々の宿舎の食事にも出ていました。鶏肉はバザールで生きたままの鶏を籠に入れて売っています。農村のほとんどの家庭では家畜として、鶏、羊、山羊は飼育していましたが、家庭で食用として処理する所は目にする事はありませんでした。

牛は農家において飼育されていますが、数はあまり多くは見かけませんでした。この地方の牛は、日本の牛に比べてやや小型で肉用としての目的で飼育されているようで、米作を主体とした農業に牛馬の利用がなされていないで、人力で耕作が行われている現状を見ると、家畜としての牛馬に何か特別な意味があるのでは、と考えさせられました。

主食の米は種類が多く、米の色や米粒の大きさも日本に比べてバラエティに富んでいます。Bangladesh の農村（特に今回訪問した Comilla 県）では米の増産に力を入れており、乾季に作付けできる Boro 種が、灌漑施設の導入により高収量が期待できるようになってきております。情報については、集落にかならず存在する茶店やバザールの電気器具店のテレビを村人はお茶を飲みながら見ています。新聞や雑誌は、村の家々ではほとんど見かけませんでした。

この国の識字率は男 53.4% 女 31.2% となっており（2002年）、とくに女性の識字率が低い状態です。人口推計・出生率・死亡率・年齢別人口構成を日本と比較してみますと以下ようになります。（2001年、世界国勢図会 14版）

	Bangladesh	日本	
総人口	1億4369万人	1億2743万人	
人口増加率(1990-2001)	2.3%	0.3%	
千人当たり出生率	29.9	9.3	
千人当たり死亡率	8.8	7.7	
年齢別	0-14歳	45.3	14.2
人口構成 (%)	15-64歳	59.2	67.3
	65歳以上	5.4	18.5

この統計にも表れていますように、村を歩いていますと大勢子供達がすぐに集まってきて、ベンガル語で話しかけます。

前回及び今回の二回にわたり Bangladesh の現地で直接目にした感想は、この国の最大の課題である貧困の解消と水環境の改善であると痛感しました。特に安全な飲料水の確保と衛生的なトイレの設置は急務であると思います。

このたび日本下水文化研究会が設置した15基のトイレが、熱帯の太陽の下で流した我々の汗が無駄にならないで Bangladesh の明日を担う子供達の健康に寄与出来る



Comilla 県の農村風景

「下肥(こやし)の力」展のご案内 — 葛飾区郷土と天文の博物館 —

東京都葛飾区にある「葛飾区郷土と天文の博物館」が、来る3月20日(日)から5月8日(日)まで、特別展「下肥の力」を開催されます。葛飾区は、江戸時代以来、都市近郊農村として発展してきましたが、農業生産の中で都市の生活廃棄物である下肥を活用して、耕地を維持してきたことに鑑みての企画とのこと。東京東郊における都市と農村の交流ネットワークの存在を明らかにし、あわせて未来社会において都市と農業の共存がどのような形で継承されるのかを模索することを意図しています。

尿尿研究分科会は、博物館からの依頼を受けて企画段階から、展示物の提供・紹介、図録執筆者・講演会講師派遣等において、側面から協力してきました。特別展に関連した講演会は4回予定されていますが、当会会員の平田純一氏が3月21日(月)に、森田英樹氏が5月5日(木)に、それぞれ講演されます。

大型連休もありますので、皆様、ふるって「葛飾区 郷土と天文の博物館」に足を運んでみたらいかがでしょうか。会場への案内は下記の通りです。

記

開催期間 平成17年3月20日～5月8日

休館日：月曜日(祝日を除く)と

第2・第4火曜日(祝日の場合はその翌日)

開館時間 火曜日～木曜日 9:00～17:00

金曜日・土曜日 9:00～21:00

日曜日・祝日 9:00～17:00

入館料 大人 100円(常設展示も見られます)

プラネタリウムの観覧を希望されるときは、別に350円

交通 京成本線「お花茶屋」駅から徒歩8分

JR常磐線・地下鉄千代田線亀有駅から徒歩25分
(駐車場に限りがあるので電車等を利用のこと)

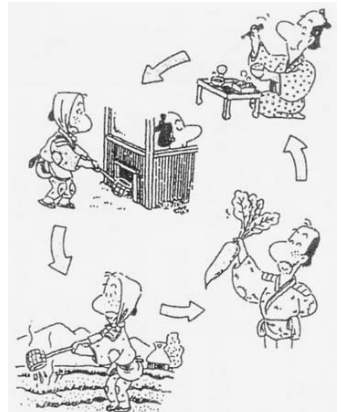
問合せ先 〒125-0063 東京都葛飾区白鳥3-25-1

「葛飾区郷土と天文の博物館」 電話 03-3838-1101

発刊予定の特別展「下肥の力」の図録(110頁)の目次を紹介しておきましょう。

第1章 江戸から肥やしがやってきた

1. 江戸の下肥ビジネス
2. 肥やしは船に乗って
3. OH ハニーワゴン
4. 肥溜めのある風景
5. 肥やしでベジタブル
6. 肥やしがつなぐ町と村
7. 下肥以前のこと



尿尿の連鎖網(出展:はばかりながら「トイレと文化」考、文芸春秋)

第2章 清潔な町

1. 下肥の飲み倒れ
2. 黄金艦隊は行く/渚の流腸/海洋投棄船に乗って
3. さすらいの肥やし
4. ムシがわく、ムシがうごめく
5. 中性洗剤・寄生虫を撲滅せよ
6. トイレは世につれ
7. 生活改善とトイレ
8. トイレのフォークロア
9. 田畑のクスリ
10. WANTED ハエ、カ、ゴキブリ
11. キタナイのフォークロア
12. ハラノムシと肥やし/下肥 THE WORLD/宇宙のトイレ

第3章 肥やしが拓く、未来を拓く

1. 失われた連鎖
2. 肥やしの力をつなげ 最前線リポート
- ① 俺たち都会の農家です
- ② 残り物からグルメ
- ③ それいけ素人百姓衆
- ④ 潜入・下水道
- ⑤ 進化する肥やし
3. 肥やしのある暮らし (地田修一記)

第32回尿尿研究会例会報告 — 「平安・鎌倉における尿尿にまつわるよもやま話」

平成16年12月17日(金)、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターで「平安・鎌倉における尿尿にまつわるよもやま話」と題して、尿尿研究会の第32回例会が行われました。講話者の相原篤郎さんは、本会の古くからの会員の一人です。パワーポイントを用いて資料の絵の一部を拡大して独自の見解を披露するなど、メリハリの効いた講話でした。関連文献のリストも配布されましたが、この分野への造詣の深さがうかがわれました。以下は、その要旨です。

- ① 貴族の家には、主人や女主人が「しのはこ」や「おおつぼ」にした排泄物を処分する樋洗童(ひすましわらは)と呼ばれる女童がいた。樋洗(ひすまし)とは、樋(便器)を洗い清めるという意味である。この言葉は、宇津保物語や紫式部日記に出てくる。同じ役目の人を表す別の言葉として御廁人(みかわやうど)があり、枕草子に出てくる。
- ② また、貴族の家には、側溝から流水を屋敷内に導入し再び下流に排水する、樋殿(ひどの)と呼ばれる一種の水

洗便所があった。糞便を垂れ流さないように、トラップを設けていたと想定される。

- ③ 一般庶民は、路上や空地で排泄していた。「餓鬼草紙」にはこのことがはっきりと描かれている。足駄を履いているが、脱糞専用のものであろう。
- ④ 「慕婦絵」や「法然上人絵伝」には汲取り便所が描かれているが、やはり専用の足駄を履いている。また、衣を掛けるところもある。
- ⑤ 一遍上人絵伝には、大勢の人々に取り囲まれ、上人の尿が「尿筒(しとづつ)」に採られているところが描かれているが、これは貴い人の尿は薬効があると信じられていたからである。
- ⑥ 「今物語」や「古今著聞集」には、尿尿にまつわる失敗話が載っている。
- ⑦ 最近刊行された、西山良平著「都市平安京」(京都大学学術出版会、2004年)は、平安京の家と排泄・トイレを述べた一章があり、たいへん興味深い本である。

(地田修一 記)

バングラデシュでトイレが完成

バングラデシュで進めていた衛生改善プロジェクトにおける本年度のトイレ建設が完了しました。右のベンガル語はトイレ建設の起工式を伝える地元紙の見出しです。記事内容を英訳してもらいましたので、抜粋してご紹介します。

Inauguration of Toilet Construction Work

With joint collaboration between BARD experts and Japan Association of Drainage and Environment (JADE), construction of toilet was inaugurated at Joypur (South) conference hall. The name of the project is "Technical cooperative activity to improve sanitation at rural area in Bangladesh focusing on dissemination and awareness raising project".

In the inauguration session the Additional Director General of BARD, two directors of BARD and principal researcher of this project Dr. Masudul Hoq Chowdhury, Japanese delegates Mr. Sakai, Mr. Hosaka, Mr. Takashi, Mr. Kawashita; associate researcher Mr. Abdullah Al Mamun, other relating members of BARD and huge number of cooperators also present on the occasion.

During the inaugural speech, Additional Director General of BARD expressed his gratitude for starting work by Japanese delegates at Comilla. Implementation of this work will be benefited to the people of this society. He was very delighted for extended the Japanese helping hands to the village. He requested the delegates to construct more toilets in some other villages.



完成したトイレの外観と内部、し尿分離式になっている

Japanese delegates Dr. Akira Sakai said that he is really delighted to start this activity. Toilet construction is not their final aim, the main purposes of the project is to improve sanitation and to decrease impacts of chemical fertilizer by using human excreta on the agricultural field. The principal researcher Dr. Masudul Hoq Chowdhury pointed that during this period 15 toilets will be constructed in four villages. A training workshop will be organized by JADE and BARD during the last week of February, 2005. Finally, the manager of Joypur (south) cooperative society thanked all and concluded the meeting.

The Daily Rupusy Bangla, Bangladesh dated 20 December 2005.

海外技術協力プロジェクト国内報告会お知らせ

今年度、地球環境基金の助成を受けて実施してまいりました海外技術協力プロジェクトにつきましては、会ならびに会員からの支援をいただくことにより、予定していた活動内容を終えつつあります。次年度においては、今回建設したトイレのフォローアップをはじめ新たな展開を図っていくつもりですが、年度の終わりにあたり右記要領で報告会を開催いたします。

日時 2005年3月26日(土) 13:30～17:00

会場 JICA 東京セミナー室

(渋谷区西原2-49-5 Tel: 03-3485-7051 京王新線幡ヶ谷駅徒歩8分)

内容 活動経緯と成果

今後の活動展開、技術的課題に関するディスカッション

※懇親会も予定しています。

運営委員会・事務局より

- 柳下重雄著の「江戸の下水道を探る(享保・明和・安永の古文書から)」が下水文化叢書8号として刊行します。第1面でお知らせした定例研究会の会場でもお渡しできますので、ふるってご参加ください。
- 叢書の刊行は本会発足の主要な目的のひとつでした。それは、一般の出版社では取り上げてもらいにくい下水文化にかかわる著書の刊行したい方を支援するというものです。会費はその出版を支えるものですから、会員には無料で配布してまいりました。しかし、現在の財政事情では、これを継続することは難しくなってきました。会の性格が変わってきた現在、会員サービスとして配布を継続するべきかどうかは、おおいに議論が必要ですが、運営委員会では、当面の措置として会費未納の会員には送付しないことといたしました。ご理解をいただくとともに、会員各位のご意見をお聞かせください。

ふくりゅう 通巻41号目次

第33回定例研究会のお知らせ	1
第32回定例研究会報告	1
途上国と日本のごみ処理に対する姿勢	2
バングラデシュ活動参加記	3・4
「下肥の力」展のご案内	5
第32回屎尿研究会例会報告	5

編集後記 今回も海外活動中心の編集になりましたが、いろいろな見方、感じ方があって面白いと思います。ようやく活動が始められたなというのが正直なところです。今後ともご支援よろしく願います。(酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>